



岸本周平
Kishimoto Shuhei
中央大学客員教授

<http://www.shuhei-k.jp>

冠婚葬祭と 候補者の悩み

落選中の候補者にとって、冠婚葬祭は支持者を固める絶好のチャンスであるとともに、いささか頭の痛いものでもあります。ドブ板選挙運動の目的は有権者の心をつかむことです。特に支援していただいている方々の身近に不幸があれば、通夜か葬儀には列席させていただき、弔意を表すのが当然のことです。お世話になっているの思いがありますから、日程をやり繰りして何とか都合をつけます。どうしても伺えないときには、弔電を打ちます。自然にそういう気持ちにそうなりますので、世間の人々が「大変だろうな……」と思われるのとは、実感は少し違います。

田中角栄さんが、葬儀の始まりから霊柩車を見送るまで、雨の中、傘もささずに、葬儀を出されたお家の門前に立ち、濡れねずみになった話は有名です。田中さんにとっては自然なことで、単なるパフォーマンスではなかったと思います。自分がやれるかどうかは別にして、心情は理解できます。

ただ、場合によっては、ご縁の薄い方や見ず知らずの方の葬儀に出るといわれる場合があります。これは故人の方にも失礼かなと思いますが、浮世の義理で仕方ありません。さらに、私のような貧乏候補者にとっては、重なる弔電代がけっこうな負担となって、ずしりと事務所経費を直撃します。供花を求められるケースではさらにそうなります。頭が痛いというのはそういうことです。

また、悲しいことに知恵がついてきまして、大きな葬儀では開始時間のかなり前から会場に入ります。時間通りに行きますと、列の最後尾になり、時間がかかります。待ち時間を考えても、早めに入った方が「効率」が良いのです。候補者になるまで、冠婚葬祭で「効率」を考えたことはありませんでした。恥ずかしいことなのですが、これが実態です。

とある先輩議員に聞きますと、斎場に問い合わせれば、翌日の葬儀の情報を教えてくれるとのこと。弔電は高いので、その情報をもとに弔問の文章を書いて斎場に持って行くのだそうです。「衆議院議員 田×男」からのも



のであれば、縁もゆかりもなかりと、弔電披露の際には、必ず読み上げてくれるそうです。ご遺族からも感謝されるというのですが、当選したとしても、まだまだ私にはそのような真似はできません。

落選中のためか、結婚式にはなかなか呼ばれませんが、祝電は打たなければなりません。頭の痛い話パート2です。これは、テレビにもよく出る議員さんの話ですが、結婚式に招待されると、ホテルであれ、結婚式場であれ、呼ばれていない会場にわざと間違えたフリをして闖入するのだそうです。ところが、本人は有名人なので、気づいたお客様は「写真撮影をご一緒に！」ということになります。そんなこんなで、全員と握手をして、名刺を配り、選挙運動にしてしまうあたり、とても真似はできません。また、多くの先輩政治家が地元で活動するときは、いつでも不意の不幸に対応できるよう、白いワイシャツと濃紺の背広に身を包み、車の中には数珠と黒いネクタイを積んでいます。これもなかなか、その心境には至りません。そんなひ弱なことではいかなのでしょうか？